

関西地方でのことばの広まりかた

藤原与一

関西域に見られる、言語事象伝播の傾向について、述べてみたいと思います。

一 「中国四国西近畿」言語地図

私の『方言学』（三省堂 昭和三十七年）の三二八～九頁に、「座敷」(家の客間)の名称の分布図があります。それを、うつしとってかかげてみます。(第一図)

はじめ、私は、この図にさほど目をとめていませんでしたが、ふとした機会に、これを見て、おどろきました。「座敷」の名のあれこれ、分布のさまが、いかにもおもしろうございます。

まず、まるで矢じるしとも言える符号の分

布に、お目をとめて下さい。まあ、これは、どなたも、最初に、すぐ、お気づきになりましよう。分布の優勢なものですから。

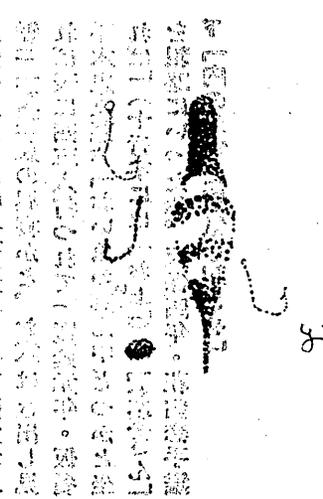
この図は、中国・四国、西近畿(主として兵庫県・大阪府)、九州のすこし、を対象とした調査の結果の、一表覧であることを、おことわりします。

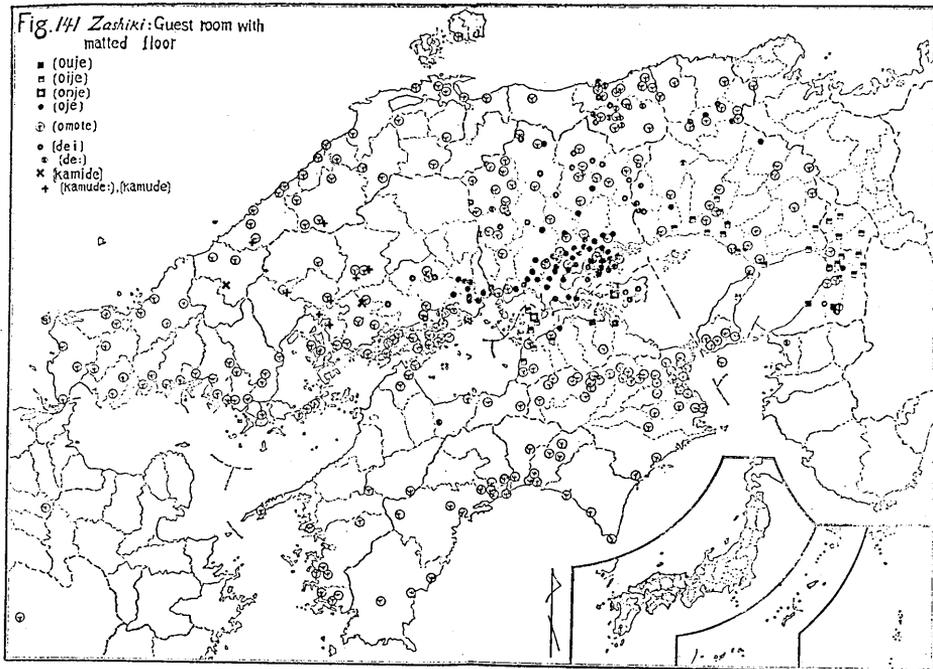
つきには、黒まる符号のまとまりが、お目にとまるのではないでしょう。ことによると、この分布が、いちばんはじめに、みなさんのお目を射たかもしれませぬ。——地図に、ぐっと、目をお寄せになった場合。……(地図全体を大観した時は、まるで矢じるしの符号の、広い分布が、やはりはじめに、目

にうつるのではないでしょうか。)

黒まる符号には、つれあいの符号がいくつもあります。太線の四角符号もあれば、四角の半半分を黒くぬった四角符号もあり、黒ぬり四角符号もあります。これらが、黒まる符号と関連しあって、近畿から四国香川県に分布しています。

以上の、まるで矢じるしの符号の分布と、黒ぬり系の諸符号の分布とを見あわせますのに、図上、どうも、前者符号の事実が、さきに関西地方におこなわれていて、そこへ、あとから、後者符号の事実が広まったのではないか、と思われてきます。それも、近畿から西へと広まったかと思うけると、ちょうどよ





第一図 「座敷」名称

いありさまになっています。
 「座敷」のことを、「オモテ」と呼ぶならわしが、まずよく全域に流布したようです。やがて、黒ぬり系諸符号の事実が、文化の中心域におこって、その、新しい言いかたの習慣が、地方へ地方へと、伝わっていったかと、見うけられるのであります。

なるほど、「座敷」は、「表」(おもて)でありましょう。今日、あらたまっては、「座敷」を「オモテザシキ」とも言っていますね。晴れの席を、「オモテ」と名づけたのは、たしかに適切で、私どもの遠い先輩・先祖は、ごくしぜんに、早く、この名をつかったかと思われまゝ。九州にも、「オモテ」の分布が見られます。近畿にもあります。

古くからの、その一般的な名称の広くおこなわれる中へ、新名、「オウエ」(お上)が登場したことでしょう。これは、「上」にわざわざ「お」をつける言いかたです

から、そうとうに、こったものです。おそらく、「子どもさん」のことを「オ子タチ」などとも言った知恵が、早く、「オ上」を創作したのではないでしょうか。ことあらたまつた「オウエ」という新名は、しだいに人々に採用され、広められたようです。

「オウエ」につれ、それものが「オイエ」です。これは、「オ家」でしょうか。諸辞書に、「お家」の語を見ることができません。前田勇さんの『近世上方語辞典』には、

おいえは「御家」必ず「お」を冠する。①土間に對して、座の上。主婦の居間、囲炉裏のある広間など特定の室をさすのではない。文政四年カ・浪花方言「御家え上る。座敷へ上がる也」元文六年・伊豆院宣源氏鑑二「又三蔵の昼寝かと、お家はき出し見れば表に四五人打つれて」寛延元年・仮名手本忠臣蔵六「おいゑの真ん中どつかと坐れば」(十行本には「お上」)②「お家さん」を粗略にいった称。天保四年・花雪窓手鑑下「内のお家に格気を起させ」

とあります。「オ上」なり「オ家」なりが、「座敷」客間の名としても、おこなわれるようになったのではないでしょうか。ともに似た発想の名まえのように思われます。

方言上では、「オウエ」が変じて「オイエ」

になることも、ありはしなかったでしょう。私が前掲の図を作った時は、両者の分布状況を見て、右の解を重んじました。たまたまということですが、前田さんのご本に、「お上^{お上}」とあるのは、私には、興味ぶかいことと思われまます。——「オウエ」[o:ɛ]から「オイエ」[oiɛ]は、「o」√「i」の変化で、すぐにできたのではないのでしょうか。(「e」に引かれもして) そうではなくて、もともと、「オ上」「オ家」の二語が、方言上に流れ伝わったのだとしても、二者は、口ことば——〔発音〕——では、兄弟分のようなものです。さほど気にとめないものを言う人たちの間では、これらは、どちらがどちらとも、わからなくなってしまうがちだったでしょう。二者の分布は、よくつれあっています。「オンエ」[onɛ]は、「オイエ」からできたものでしょうか。——方言にありがちの、「イ」と「ン」との交替で。香川の島での様子は、右の変化を思わせます。「オウエ」から「オンエ」も、できてよかったことかと思われまます。いずれにしても、「オンエ」が、変化の、一つの果てであることは明らかでしょう。分布も、そのことを、よくものがたっています。

「オエ」[oi]というのが、また、転訛の果ての形ですね。これが、岡山県下、つづいて広島県東南部と、近畿から言えば西の先に見え、また、近畿でも、阪神からは距った地帯に見えるのは、もっともなことに思えます。「オウエ」なり「オイエ」なりの流布するうちに、先の方で、だんだん、しぜんの変化形、「オエ」が生じたのではないのでしょうか。もっとも、岡山・広島の両県の方では、いっそう、「オエ」が生じやすかったかもしれません。この方は、[ɛ]√[ø] [ø] [ø]、[o:]√[ø:] [ø:] [ø:] のさかんな所ですので、「オエ」(↓[oiɛ]) への音変化も、しぜん、おこりやすかったかとも察せられます。東の愛知県下なども、「おけあやま弁」に「おけあーせことば」というわけで、岡山県方面のに似た発音をする所ですが、この方にも、「オエー」「オーエ」「オンイエ」「オンエ」のあることが、『日本国語大辞典』(小学館)の記事でわかります。

以上で、黒ぬり系諸符号の諸語のとりあつかいがおわかりました。これら一体の、山陰へよりは山陽に、ずっと伸びている分布相に、かさねてご注意下さい。(阪神へのご留意はもとよりとして)。

さて、右の黒ぬり系諸符号(「オウエ」類)の分布の外がわに、太線黒まるの符号や、まるにたてぶと線の符号、濃い掛けじるしの符号、濃い十字の符号が見えます。「デイ」「デー」「カミデー」「カムデー、カムデー」の分布です。——これらが、「オモテ」の広い分布と、「オウエ」類の集中分布との間に、はさまったかっこうでもありますね。

「デイ」は、「出居」と書きあらわしうるものでしょう。昭和二十八年五月十五日発行の「新日本分県地図 京都府」(和楽路屋)の「県下要覽」の中の、「物産・方言」の、「方言」の条にも、

父を「お出居さん」とあります。お父さんはしばしば客間の方に
出て居るので、「お出居さん」でしょうか。
出て居る客間が、また、世に「出居」(デイ)と呼ばれているのもうなずかれます。

(家の奥の間などが、「デイ」と呼ばれるはずはなかったでしょう。「出る」となれば、やはり、晴れの、おもての方の間へだったろうと思われまます。そこへ出る、おもな人が、主人たる「父」であったことは、言うまでもありますまい。)

私は、瀬戸内海の大三島の北端の一集落にうまれましたが、少時から、「レー」ということばを知っていました。「デイ」(出居)のことです。子どもは、みだりにそこへはいることはゆるされていません。時たまはいつてあばれていては、叱られました。「レー」は、やはり、文字どおりの「客間」(父が晴れがましく人と応対する所、お客呼びのもてなし場所)でした。私は、のちに、方言を研究する身となりましたが、この「デー」というのは、めずらしい一音語でもあるので、何のことか、久しくわからないでいました。「ことばの地図」を作る研究にもはいるようになって、——さきにかかげたような図をこしらえてもみるようになって、そうだったのかと、がてんがいったしだいです。「レー」は「デー」の訛りなのですね。

「カミデ」というのは、「上の出居」で、もっともしごくの名称です。人は、「デイ」の位置・地位を考えて、念入りに「カミ出居」とも呼んだのではないでしょう。よくある、名づけのていねいさです。「カムデー」「カムデ」が、「カミ出居」の発音の訛りであることは、申すまでもありますまい。

さて、この「デイ」類の分布が、図上に見

られるとおりのありさまであるのは、私どもに、どういうことを考えさせましょうか。

(まず、大阪府下などにもあるのを、見のがさなないようにして下さい。)京都弁にも、「お出居さん」との言いかたなどもあるのからすると、「出居」という言いかたは、みやこ地域にもあったとされます。——今、京都に、「座敷」のことを言う「デイ」があるかどうかは別としまして。「出居」ということばは、「客間」の名としても、たぶん、中央域から地方へと、広まったらしいことが想像されます。現在の「デイ」類の分布が、兵庫県北の一部から鳥取県因幡に、ついで、岡山県東の作州から、備中・広島県下・島根県石見に見られるのは、かつて「デイ」類が、中央から当地方へと、伝播・流布してきたことを、よく思わせるのではないでしょう。山陰がわは、因幡までの分布ですが、山陽がわは、ずっと西まで(石見は安芸のつづきで山陽的)、問題の事象が分布しています。南北の、この一連の分布相は、中央方面から地方へ、ものの流布してきたこと、流布してくる道理(ものの広まってくるきかた)を、味わい深く、よみとらせるように思います。山陰地方へは、交通路の不活発さなどのため、伝播

が、伸びにくかったのではないでしょう。山陽地方へは、交通路はより開けているし、受け入れがわの生活文化の状況もより活発というようなことで、中央からの伝播が、いちだんとさかんだったことかと察せられます。「デイ」類の分布の西端方面に、「カミデ」などが分布しています。ものの流布の末端方面であっただけに、この方には、こういふ、新意匠の語もできているということなのでしょう。それからしても、このさい、山口県下には「デイ」類がなくて、石見にはあるのは、双方の土地の、方言上の性質差を考えさせます。しぜんには、広島県下のものを、石見は、比較的よく受け入れたのでしょうか。とかく、石見は、広島県安芸に同じがちです。

さきの「オウエ」類の場合にも、右の「デイ」類の場合にも、中央から地方への、——今は近畿から山陽(ならびに四国)・山陰への、ことばの、しぜんの広まりかたが、じつによくわかるように思われます。自然であって合理的な広まりかたが、ここにあると、言えるのではないでしょう。

右二者と、「オモテ」との、三者の分布の

相互関係を、図上で解釈してみますれば、当初には、「オモテ」が広く分布していたのだろう、と、まず解されます。つぎに中央から新しく流布し伝播したのが、「デイ」類だったでしょう。——これは、今、「オウエ」類に押され、押しやられたかっこうで、中央から言えば、「オウエ」類の見られる所よりも遠い所に分布しています。図に、「デイ」類が、「オウエ」類よりも先に、地方流布をとげたことが明らかであります。「オウエ」類は、要するに、第三の新興勢力をなしたものでしょう。

したがって、私どもは、語としても、「客間」を言うものでは、「オモテ」がなかなか古くて、つぎが「デイ」(出居)類、つぎが「オウエ」類、と考えることができます。

ここで、史上の文献に、右の三派の語をたずねることが、課題となります。『日葡辞書』には、「Dei」が見え、そこに「ザンキ」という語もあがっています。私は、さっそく、畏友の森田武さんの所につけ、教えを乞いました。『日葡辞書』の、その説明は、

同義語、ザンキ。

お客さんをそこでもてなす客間、またはへや。

というのだそうです。つづけて、この辞書に、他語をたずねていただきますと、「オウエ」も「オイエ」もなく、一つ、「オモテノマ」がありました。これは、

船のへさきの客間、または家の正面の間。と説明されているそうです。(船の「オモテノマ」ということは、今日も聞くことばですが、『日葡辞書』の編者は、当時、よくまあ、こういう点も、見のがさないで、とらえ得たものだ、おどろかされます。「家の正面の間」のことを、「オモテノマ」と言ったとすれば、「オモテ」の語を、「客間、座敷」を言うのにつかうことも、当時すであつたかも知と、想像されますが、本書に、「客間、座敷」を言う「オモテ」はあがっていません。森田さんには、節用集の方面もしらべていただきましたが、「出居」はありませんでした。「座敷、客間」を言う「出居」は、そんなに古いことばのようではありません。もっとも、米谷巖さんのご好意で見ることのできた、『嬉遊笑覧』卷一上「居処」の中には、『源氏物語』「柏木」巻の、
れととの御いでるのかたに入たまへり
という引用が見えます。「いでぬ」の語そのものは、古くからあるのでしょうか。です

が、「デ居」となると、これはまた別かと思えます。

「客間、座敷」を言う「デイ」は、さほど古いものではなく、と言つても、近古のもので、「オウエ」類は近世のもの、ということになりましょうか。三派の語の新旧関係は、おおよそ、「座敷」名称の、さきの分布図で解釈されるようなものであつたろうと思われま

二 「中国四国西近畿」の他の図

「座敷」名称の図は、関西での、ことばの広まりかたを、よく、とらえさせました。ことばの移り変わりの歴史を反映しつつ、りくつよく、ことばの、地方に流布しているありさまが、右の図で、よくとらえられました。このさい、重要視されるのは、伝播流布に、すじ道による、勢力の大小があつたということです。(したがって、伝播に遅速があつたという事です)——つまり、山陰へよりは山陽方面に、ものがより活発に広まったということ

ことです。このことは、他の言語地図を見ても、よく理解することができます。「いちじく」名称の図を見ましても、「トীগキ」という語が、

大阪府・兵庫県南にいちじるしくて、山陰には、ほとんどなく、山陽（それに石見）に、広く見わたされます。内海の島々にもずっとこれが見られ、四国本土にも、いくらから見られます。私は、この場合、内海域の分布は、山陽道すじのものの南下によるものであらうと見ています。「トーガキ」は、このように、近畿にさかんで、かつ、山陰方面へよりも山陽方面に、くっきりとした分布を見せています。西近畿・中国・四国の、全般にあるものは、「イチヂ（ジ）ク」「イチジユク」です。「トーガキ」は、「イチヂク」ののちに、新名として発生し、その、後生者であるのにふさわしく、山陽がわへはつよく分布したのではないでしようか。

思えば、「トーガキ」は「唐の柿」で、「唐」という漢語をつかった、しゃれた名です。「唐なす」「唐きび」などと、「唐」の字をつかった呼び名が、つきつきと思っておこされますね。こういった名称は、あい似たところに、おそらく、国の中央方面で、多く創作されたのではないでしようか。「カライモ」の名は、西から東に流入したことがあっても、「トイモ」の名は、東から西に伝わることがあったのではないかとも思います。新製

作の、時にはハイカラの、「唐になに」という名が、よく、地方へ伝播しただろうと思われます。その、地方というのが、西では、「早くも山陽道に」ということだったようです。

むかしの「唐ガキ」に対応する名、「西洋イチジク」などというのが、今日、ありますね。

つぎに、もう一図、打消ことばの「〱ザッタ」「〰ナンダ」を見ます。略図にしかかかれますと、西近畿・中国・四国では、つぎのようです。（第二図）

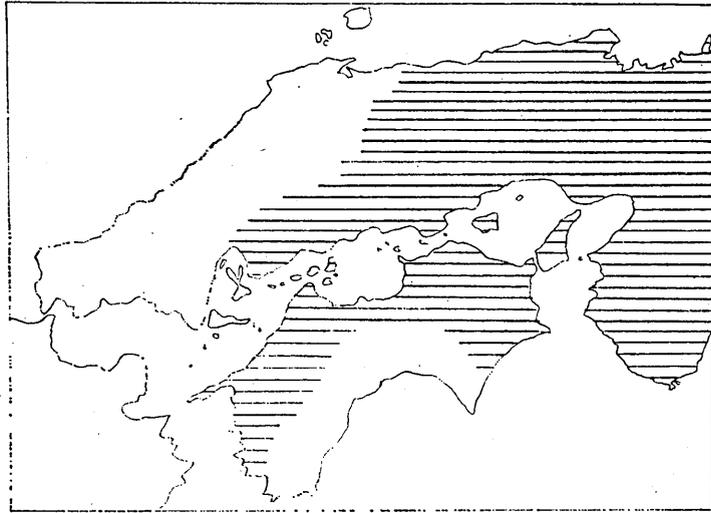
「どうどうゼザッタ」の「ザッタ」（「ダッタ」も）が、中国の西北から西部にかけて見られ、四国は、南の土佐に見られ、九州にも見られます。このような、遠辺・遠方の「ザッタ」分布の内がわに、「ナンダ」がひろがっています。「ナンダ」は、「ザッタ」ののちにうまれたものと思われます。その「ナンダ」が、近畿で新興勢力をなしますと、やがてしだいに、西方へ伝播しはじめました。その、流布のありさまが、図上、横線模様のとおりであります。中国では、山陽道がわで、より西に、分布の伸びているさまが明らかであります。四国でも、およそ北半に、「ナンダ」

が分布しています。内海がわ、それに、近畿に近い阿波が（「阿波路」の淡路島とともに）、「ナンダ」をよく見せているのは、近畿中心のものに伝播の結果として、もっともなことに思えます。

じつは、四国の、讃岐西部から伊予にも、「ザッタ」があります。また、中国の、岡山県（主としてその西半）・広島県にも、「ザッタ」「ダッタ」があります。これらの地域では、「〱ザッタ」の言いかたに重なって、「〰ナンダ」の言いかたが存在します。

そこで、こう言えると思います。「〰ナンダ」の言いかたは、新しく西に流布しはじめ、その伝播は、地理にしたがって、自然的合理的に伸び、徐々に、「〱ザッタ」の言いかたを駆逐している、と。この勢力の、まだ及ばない所が、「ザッタ」だけを示しているのですね。

四国では、土佐だけが、きわだって、「ザッタ」を示しています。——分布は、こうあって、いかにもと思われますね。四国山脈のむこうの南国土佐は、古態の「ザッタ」を守って、その地の歴史的地位を明らかにしています。



第二図 「～ナング」の分布(横線じるし)

「なにになにダ」「ジャ」「ヤ」という、言いきりことばがありますね。このうち、「ジャ」と「ヤ」とでは、「ヤ」の方が後輩だと思われれます。「ジャ」から「ヤ」ができたと思いますか。新興勢力の「ヤ」は、また、近畿中央部に早くでき、できたものが、——に四方へ広まっていったようです。

ところでこれは、西は兵庫県下どまりで、岡山県下には、広まっています。(四国の香川県などには、かなりよく「ヤ」が見られますが、今は中国がわのことを申しませぬ)なぜ、岡山県下には、「ヤ」ができていないのでしょうか。(また、受け入れられていないのでしょうか。)

「ヤ」は「ジャ」よりも、発音の、よわく軽いものです。岡山弁には、抑揚の、

○オトナリー ヤッタンジャ。おとなりへやったのよ。(その猫の子を。)

など、「ジャ」を、声高に伸ばして言う習慣があります。こういう中へは、「ヤッタンヤ」といった調子の、やわらかく軽い「ヤ」は、根づきにくいのではないのでしょうか。

抑揚の調子に、いささか別趣の認められる近畿南辺に、また、近畿内のことではありますが、「ジャ」がよくおこなわれています。

三 国立国語研究所『日本語地図』

近畿の南辺と、四国の南国土佐と、これらはともに、近畿のみやこ方面からの、先述のような、事象の新伝播には、とり残されがちだったようであります。

国語研究所の言語地図、149の「かたぐるま(肩車)」の図を見ますと、ほかならぬ、四国南半と近畿南部とに、共通して、「クビウマ」の分布が見られます。類例は、他図にも見られます。このような彼我の一致は、中央からのもの(また、ものをおこす可能性)を受容する、遠隔地位者双方の、境遇の類似を、よく示すものでありましょう。(50・3・19)

(ふじわらよいち・国語学)